

南宋包恢の陸九淵評価

—「三陸先生祠堂記」精読（下）—

中嶋 諒

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

3. 「三陸先生祠堂記」精読（下）

其窮理也、則曰積日累月、考究磨練。⁽¹⁾嘗終日不食、而欲究天地之窮際、終夜不寢、而灼見極樞之不動、由積候以考曆數、因笛聲以知律呂。⁽²⁾復齋嘗問其用功之處、則對以在人情、物理、事勢之間。嘗曰、吾今一日所明之理凡七十餘條。曰、天下之理無窮、以吾之所歷經者言之、眞所謂伐南山之竹、不足以受我辭、然其會歸、總在於此。則與徒研窮於方冊文字之中者不同、何不知者反謂其不以窮理爲學哉。其讀書也、則曰、古人爲學、即是讀書、而以何必讀書、然後爲學之反說爲證、以東書不觀游談無根之虛說爲病。平昔精勤、人所不知、惟伯兄每夜必見其觀覽檢閱之不輟、嘗明燭至四更而不寐。⁽³⁾欲沈涵熟復而切己致思、欲平淡玩味而冰釋理順。此則與徒乾沒於訓詁章句之末者大異。何不知者反妄議其不以讀書爲教哉。

〔校異〕異同なし。

〔注釈〕

- (1) 積日累月、考究磨練…「語録」下・254条（包揚録／463頁）に、「然某皆是逐事逐物攷究練磨、積日累月、以至如今、不是自会、亦不是別有一竅子、亦不是等閑理会、一理会便会」とある。
- (2) 嘗終日～終夜不寢…「年譜」紹興12年（1142・先生4歳／481頁）条に「常侍宣教公（陸九淵の父、陸賀を指す）行、遇事物必致問。一日、忽問天地何所窮際、公笑而不答、遂深思至忘寢食」とあり、また紹興21年（1151・先生13歳／482頁）条に「先生自三四歳時、思天地何所窮際不得、至於不食」とあるのを踏まえる。
- (3) 灼見極樞～知律呂…未詳。「極樞」は北極星、「積候」は天文を観察することをいう。陸九淵は「語録」上・140～142条（巖松録／413頁）において、日月の運行について説かれた『尚書』洪範の孔穎達疏をほぼそのまま祖述するなど、天文分野にかんして一定の関心があったと考えられる。律呂（音階）については、僅かに「文集」巻21、「易数」為連叔広書（260頁）に「十日者陽也、乃二五之数。十二辰者陰也、乃二六之数。天中数为十日、地中数为十二辰。五音六律、亦由是也」などとあるのみである。
- (4) 復齋嘗問～事勢之間…「語類」上・40条（傅子雲録／400頁）（「年譜」紹興32年（1162・

先生24歳)条とはほぼ同一記事/485頁)条に「復齋家兄(陸九淵の5兄、陸九齡を指す)一日見問云、吾弟今在何処做工夫。某答曰、在人情事勢物理上做些工夫」とある。

- (5) 吾今一日～七十餘條…未詳。陸九淵自身の発言と思われるが、管見の限り、現行の「文集」「語録」「年譜」には見当たらない。
- (6) 天下之理～總在於此…「語録」上・14条(傅子雲録/397頁)に、「天下之理無窮、若以吾平生所經歷者言之、真所謂伐南山之竹、不足以受我辭。然其會歸、總在於此」とある。「所謂」以下は、『漢書』卷66、公孫賀伝に「南山之竹不足受我辭、斜谷之木不足為我械」を典拠とし、南山の竹を刈り尽くしても書ききれないことをいう。「會歸」は、集まり帰すること。『尚書』洪範に「會其有極、歸其有極」とあるのを踏まえるか。
- (7) 古人為學、即是讀書…「語録」下・253条(包揚録/463頁)に、「古人為學即讀書、然後為學可見」とある。
- (8) 以何必～反説為證…もと『論語』先進に「子路曰、有民人焉、有社稷焉。何必讀書、然後為學。子曰、是故惡夫佞者」とある。これを踏まえて「文集」卷3「与曹立之」2(40頁)に「答子路何必讀書之説、則厲辭以斥其過、而不容其弁」とある。
- (9) 以束書～虚説為病…もと蘇軾『文集』卷11、「李氏山房藏書記」(中国古典文学基本叢書、中華書局1986年3月/2・359頁)に「近歲市人輒相摸刻諸子百家之書、日伝万紙、學者之於書、多且易致如此、其文詞學術、当倍蓰於昔人、而後生科舉之士、皆束書不觀、游談無根、此又何也」とある。これを踏まえて「語録」上・166条(嚴松録/419頁)に「束書不觀、游談無根」とある。
- (10) 惟伯兄～而不寐…「伯兄」は、陸九淵の長兄、陸九思を指す。「語録」下・254条(包揚録/463頁)に、「某從來勤理會、長兄每四更一点起時、只見某在看書、或檢書、或默坐」とあり、また「年譜」紹興19年(1149・先生11歳/482頁)条に、「伯兄總家務、嘗夜分起、見先生觀書、或秉灯檢書」とある。
- (11) 欲沈涵～冰釋理順…「語録」上・98条(傅子雲録/407頁)に、「先生云、學者讀書先於易曉處沈涵熟復、切己致思、則他難曉者、渙然氷積矣」とあり、また「語録」下・15条(周清叟録/432頁)に、「讀書之法、須是平平淡淡去看、子細玩味、不可草草。所謂優而柔之、厭而飶之、自然有渙然氷積、怡然理順底道理」とある。

〔通釈〕

窮理について、(陸先生は次のように)おっしゃった。「月日を重ねて、考究錬磨する。」「かつて終日食事も取らず、天地の果て(がどこにあるか)を究明しようとして、一晚中眠ることがなかった。」「北極星が微動だにしないことを見極め、天文観測から曆数を考察し、吹笛の音色から音階を理解した。」「かつて陸九齡(復齋)が修養のなしどころを質問したところ、(陸九淵は)「人情、物理、時勢の間にある」とお答えになった。またかつて(陸先生は次のように)おっしゃった。「私が一日で明らかにした理は、すべてで七十余りである。」「天下の理は極まりない。私が経験したことを語ろうにも、まさにいわゆる「南山の竹を刈り尽くしたところで、私のことばは書ききれない」である。けれどもこれらの帰結点は、すべてこの理にある。」これらはいたずらに書物や文章

を研究するものとは同じでないが、なんと（陸先生のことばを）知らない者たちは、かえって窮理を学ぶことはなかったというのである。

読書について、（陸先生は次のように）おっしゃった。「古人の学問とは、すなわち読書である。」（さらに陸先生は）（『論語』先進に見える）「何ぞ必ずしも書を読み、然る後に学と為さん」（という子路の発言）に対して（孔子が）反論したことが（「古人の学問とは、すなわち読書である」ことの）証拠であるとし、また「書物を束ねたままで読みもせず、根拠のないことを談ずる」という虚説を病弊とした。（陸先生は）平生ひとすじに励んでおられたが、人の知るところとはならず、ただ長兄（陸九思）が、毎晩必ず書物を閲読して止まず、つねに明かりを灯して真夜中になっても眠ることのない姿を見ているだけであった。「深くじっくり繰り返し熟読し、我が身にひきつけて思いをめぐらす」、「あっさりとかつ味わいながら、氷が解けるように理解する」。これらはいたずらに訓詁や章句の末節に埋没するものとは大いに異なっているが、なんと（陸先生のことばを）知らない者たちは、かえって読書を教えることはなかったと妄言するのである。

抑或謂其惟務超悟、而不加涵養、不求精進也。曾不知其有曰、⁽¹⁾惟精惟一、⁽²⁾涵養須如是。學之正而得所養、如木日茂、泉日達、孰得而禦之。曰、⁽³⁾雖如顔子、未見其止。易知易從者、實有親有功、可久可大、豈若守株坐井然者。則如彼或者之所謂者誤矣。又或謂其惟尚捷徑、而若無次第、若太高也。曾不知其有曰、⁽⁴⁾學有本末先後、其進有序、不容躐等。⁽⁵⁾吾所發明端緒、乃第一步、所謂升高自下也。曰、⁽⁶⁾天所與我、⁽⁷⁾至平至直、⁽⁸⁾此道本日用常行、⁽⁹⁾近乃張大虛聲。當無尚虛見、無貪高務遠。至有一二問學者、惟指其嘗主持何人詞訟、開通何人賄賂、以折之曰、即此是實學。如或者之所謂者、又誤矣。〔校異〕異同なし。

〔注釈〕

- (1) 惟精惟一～須如是…「語録」下・184条（包揚録／455頁）に「惟精惟一、須要如此涵養」とある。「惟精惟一」は、もと『尚書』大禹謨に「人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中」とあるのを踏まえる。
- (2) 學之正～而禦之…「文集」巻5「与呂子約」（62頁）に「學之正而得所養、如木日茂、如泉日流、誰得而禦之」とある。
- (3) 雖如顔子～坐井然者…「文集」巻5「与戴少望」（63頁）に「雖如顔子、夫子猶曰未見其止。易知易從者、實有親有功、可久可大、豈若守株坐井然哉」とある。「未見其止」は、『論語』子罕に「子謂顔淵曰、惜乎、吾見其進也、未見其止也」とあるのを踏まえる。また「易知易從者」から「可久可大」までは、『周易』繫辭上に「易則易知、簡則易從。易知則有親、易從則有功。有親則可久、有功則可大」とあるのを踏まえる。さらに「守株坐井然」は、いわゆる「守株」の故事、すなわち『韓非子』五蠹に「宋人有耕田者、田中有株、兔走、触株折頸而死、因絜其耒而守株、冀復得兔、兔不可復得、而身為宋国笑」とあるのを踏まえる。
- (4) 學有本末～不容躐等…「文集」巻7「与詹子南」1（96頁）に、「為學有本末先後、其進有序、不容躐等」とある。なお「躐等」は、もと『礼記』学記に「幼者聽而弗問、学不躐等也」とあり、段階を踏まずに一足飛びに進むことを指す。

- (5) 吾所發明～自下也…「語録」上・81条（傅子雲録／405頁）に、「吾所發明為學端緒、乃是第一歩、所謂升高自下、陟遐自邇」とある。「升高自下」は、『尚書』太甲下に「若升高必自下、若陟遐必自邇」とあるのを踏まえる。なお朱陸の初の面会として知られる、いわゆる鵝湖の会に際して詠じられた陸九淵の七言律詩の尾聯（第7・8句）にも「欲知自下升高処、真偽先須弁只今」（「語録」上・203条、巖松録／427頁）（また「文集」巻25、「鵝湖和教授兄韻」／301頁）とある。
- (6) 天所與我、至平至直…未詳。あるいは「文集」巻14、「与包敏道」2（183頁）に、「大人之事、至公至正、至广大至平直」とあるのを指すか。「天所与我」は、『孟子』告子上に「此天之所与我者、先立乎其大者、則其小者不能奪也」とあるのを踏まえる。
- (7) 此道本～大虚聲…「語録」下・67条（李伯敏録／437頁）に、「然此道本日用常行、近日学者把作一事、張大虚声、名過於実、起人不平之心」とある。
- (8) 當無尚虚見、無貪高務遠…「語録」下・321条（李伯敏録／469頁）に、「只就近易処、着着就実、無尚虚見、無貪高務遠」とある。
- (9) 至有一二～是實學…未詳。「実学」については、例えば「文集」巻7、「与詹子南」3（97頁）に「蓋古人皆実学、後人未免議論辞之累」とあり、また「文集」巻12（158頁）、「与趙然道」3に「求真実学者於斯世、亦誠難哉」とある。

〔通釈〕

さて（陸先生は）ただ超悟に努めるのみで、涵養を加えず、精進を求めなかったというものがいる。これは（陸先生に）次のようなことばがあるのを知らないのである。「涵養は（『尚書』大禹謨にいう）「惟れ精惟れ一」のようにすべきである」、「学問に正しく養うところがあれば、木が日々茂り、泉が日々湧き出るように、誰がこれを妨げることができるであろうか」、「顔子にはとどまるところを見たことがない。知り易く従い易いものは、本当に親しみがあり功があり、久しくして大きなものである。どうして（顔子は）漫然と株を守って座しているだけのような者であったであろうか。」前述のような者たちが（陸先生はただ超悟に努めるのみで、涵養を加えず、精進を求めなかった）ということは間違いである。

また（陸先生は）ただ抜け道を尊ぶのみで、段階がなく、高遠に過ぎるようだというものがいる。これは（陸先生に）次のようなことばがあるのを知らないのである。「学問には本末や前後があり、進歩には順序があり、一足飛びに進んではならない」、「私が明らかにした端緒は、それこそ第一歩である。（『尚書』太甲下に）いわゆる「高きに升るに下き自りす」である」、「天が私たちに附与したものは、いたって平易、いたって率直なものである」、「この道はもとより日々用いられ、常に行われるものであるのに、近ごろ（の者たち）は空疎なことばを大げさに張りあげている」、「空虚な意見を尊んだり、むやみに高遠なものを求めたりするべきではない」、学を問う者たちに対して、ただ彼らが誰の訴訟を担当し、誰の賄賂を受け取ったかを指摘し、それを非難して「これが実学である」といった。前述のような者たちが（陸先生はただ抜け道を尊ぶのみで、段階がなく、高遠に過ぎるようだと）いうことも間違いである。

獨所大恨者、道明而未盛行爾。故上而致君之志、僅略見於奏對⁽¹⁾。惟其直欲進於唐虞、復乎三代、超越乎漢唐、此乃朱文公稱其規模宏大、源流深遠、非腐儒鄙生之所能窺測、而語意圓活、混浩流轉、見其所造深而所養厚也。下而澤民之意、亦粗見於荆門⁽⁴⁾。惟其以正人心爲本、而能使治化孚洽、人相保愛、至於無訟、答箠不施、雖如吏卒、亦勉以義、此乃識者知其有出於刑政號令之表、而周文忠以爲荆門之政可驗躬行之效者也。然其所用者有限、而其所未用者無窮。先生以道之廣大悉備、悠久不息、而人之得於道者有多寡久暫之殊、是極其所志、非多且久未已也。故自志學而至從心、常言之志所期也。嗚呼、假之以年、聖域固其優入、而過化存神、上下天地同流之功用、非曰小補者、亦其所優爲也。孰謂其年僅踰中身而止知命哉。邇其旨、與梭山未同者、自不嫌於如二三子之不同而有同。若復齋、則初已是其說於鵝湖之會、終又指言其學之明於易簣之時、則亦無間然矣。逮論其文、則嘗語學者以窮理實則文皆實、又以凡文之不進者、由學之不進。先生之文、即理與學也、故精明透徹、且多發明前人之所未發、炳蔚如也。

〔校異〕

a 明…此の字無し（校勘に「據道光本刪」とあり）。

〔注釈〕

- (1) 奏對…淳熙 10 年（1183・先生 45 歳）の冬、陸九淵は勅令所刪定官の職を得、その翌年には、殿に上って五箴（五か条の上奏文）を輪對（官吏が順番に政治の得失を皇帝に答えること）した。その五箴は、いま「文集」巻 18、「刪定官輪對箴子」1～5（221～224 頁）に見ることができる。
- (2) 惟其直～乎漢唐…例えば、「文集」巻 18、「刪定官輪對箴子」1（222 頁）に「將見無愧於唐虞之朝、唐之太宗誠不足為陛下道矣」、また同 4（223 頁）に「三代之政豈終不可復哉」などとある。
- (3) 朱文公～所養厚也…『朱文公文集』巻 36、「寄陸子靜」1（『朱熹集』、四川教育出版社、1997 年 5 月、所収／3・1570 頁）に「奏篇垂寄、得聞至論、慰沃良深。其規模宏大而源流深遠、豈腐儒鄙生所能窺測。……語円意活、渾浩流轉、有以見所造之深、所養之厚、益加歎服」とある。
- (4) 荆門…いまの湖北省荆門市。紹熙 3 年（1192・先生 54 歳）正月 15 日、陸九淵はここで、『尚書』洪範に見える「皇極」の語についての講義を行い、吏民の教化を試みた。その大要は、いま「文集」巻 23、「荆門軍上元設序皇極講義」（283～286 頁）に見ることができる。
- (5) 惟其以正人心爲本…「語録」上・195 条（嚴松録／425 頁）に、「學者問、荆門之政何先。對曰、必也正人心乎」とある。「正人心」は、『孟子』滕文公下に「我亦欲正人心、息邪說」とあるのを踏まえるか。
- (6) 能使治化～效者也…「年譜」紹熙 3 年（1192・先生 54 歳）条に引く章穎（茂猷）宛ての書簡（511 頁）に「先生治化孚洽、久而益著。既逾年、答箠不施、至於無訟。相保相愛、閭里熙熙、人心敬向、日以加厚。吏卒亦能相勉以義、視官事如家事、識者知其有出於政刑号令之表者矣」とある。また同条に引く周必大（益公）の文（512 頁）に「荆門之政、可以驗躬行之效」とある。なお「周文忠」は、周必大（1126～1204）、文忠は諡。江西廬陵の人。左丞

相にまで至り、益国公に封ぜられたほか、多くの詩文、随筆を著した文学家としても知られている。

- (7) 道之廣大～久暫之殊…「文集」巻22、「雑説」(271頁)に「然道之廣大悉備、悠久不息、而人之得於道者、有多寡久暫之殊、而長短之代勝、得失之互居、此小大広狭浅深高卑優劣之所従分、而流輩等級之所由弁也」とある。
- (8) 自志學～所期也…陸九淵が学問の出発点として、「志」の重要性を説いていたことは、例えば「文集」巻23「白鹿洞書院論語講義」(275頁)に「窃謂學者於此、當弁其志。人之所喻由其所習、所習由其所志。志乎義、則所習者必在於義、所習在義、斯喻於義矣。志乎利、則所習者必在於利、所習在利、斯喻於利矣。故學者之志、不可不弁也」とあり、あるいは「語録」上・22条(傅子雲録／398頁)(また「年譜」乾道8年(1175・先生34歳)条／489頁)に「傅子淵自此帰其家、陳正己問之曰、陸先生教人何先。対曰、弁志」などとある。なお「志学」、「従心」の語は、『論語』為政に「子曰、吾十有五而志于学、三十而立、四十而不惑、五十而知天命、六十而耳順、七十而従心所欲不踰矩」とあるのを踏まえる。またこの句に対する陸九淵の解釈は、「文集」巻7、「与詹子南」1(96頁)などを参照。
- (9) 過化存神～小補者…『孟子』尽心上に「夫君子所過者化、所存者神、上下与天地同流、豈曰小補之哉」とある。
- (10) 與梭山未同者…「梭山」は、陸九淵の四兄、陸九韶を指す。陸九韶と陸九淵の思想の差異は、例えば「語類」上・71条(傅子雲録／404頁)に「梭山(=九韶)兄云、後世之人、病正在此、都荀子莊子輩壞了。(陸九淵)答云、今世人之通病、恐不在此」とあることなどから垣間見える。
- (11) 鵝湖之會…淳熙2年(1175・先生37歳)、江西鉛山の鵝湖寺で行われた陸九淵と朱熹との初の直接対決。陸九淵やその門弟たちも同行した。「語録」上・203条(嚴松録／427頁)、「年譜」淳熙2年条(490頁)を参照。なお「語録」には「先兄遂与某議論致弁、又令某自説、至晚罷。先兄云、子静之説是。次早、某請先兄説、先兄云、某無説、夜来思之、子静之説極是」とあり、陸九淵が陸九淵の説に同意しているさまが見受けられる。
- (12) 終又指言～易簣之時…「語類」上・204条(嚴松録／428頁)に、「先兄復齋臨終云、比来見得子静之学甚明、恨不得相与切磋、見此道之大明耳」とあるのを踏まえる。
- (13) 逮論其文～學之不進…未詳。あるいは陸九淵が、『周易』繫辞上や説卦を参照し、「文」について論じた以下の箇所を踏まえるか。「語録」上・187条(嚴松録／424頁)に「梭山(九韶)一日対学者言曰、文所以明道、辞達足矣。意有所属也。(九淵)先生正色而言曰、道有變動、故曰爻。爻有等、故曰物。物相雜、故曰文。文不当、故吉凶生焉。昔者聖人之作易也、幽賛于神明而生蓍、参天兩地而奇数、觀變于陰陽而立卦、発揮于剛柔而生爻、和順于道德而理于義、窮理尽性以至于命、這方是文。文不到這裏、説甚文」とある。

〔通釈〕

大いに残念なことは、(陸先生の)道は明らかでありながら、それが盛んに行われることがなかったことに尽きる。参内して君主に仕えんとする志は、僅かにそのあらましが、奏対(刪定官輪

対筭子)に見えるのみである。思うに(陸先生は)直接に唐堯虞舜に近づいて、夏殷周三代に復帰して、漢代唐代を飛び越えようとした。これについて朱熹(文公)は、「(陸九淵は)規模が大きく、源流が深く、俗人鄙儒がうかがい知れないものである。ことばや想いは円滑で、どっしりとしていて淀みなく、行きつくところは深遠で、育むところは淳厚であるようだ」と称賛した。

下交して人民に恩沢を施そうとする意は、またあらかた荆門(軍上元設庁皇極講義)に見える。(陸先生の湖北荆門での政は)ただ人心を正すことを根本とするのみであった。(陸先生の)教化はまことにあまねく、人々は互いに養い愛しあい、訴訟はなくなり、鞭打ちの刑は行われず、小役人たちは義をもってつとめることができていた。これらは識者の間では、刑罰や政令のもとに行われていると知られており、周必大(文忠)は、湖北荆門での政は、(陸先生)自らの実践の効果があらわれたものだと考えていた。

けれども行われたことには限りがあり、行われなかったことには窮りがない。陸先生は、道は広大にして尽く備わっており、悠久にして止むことがないが、人が道を手にするや多少長短の差異があらわれるので、志すところを極めるには、多くかつ久しくならなければ止めないことだと考えた。それゆえ「(十有五にして)学に志す」から「(七十にして)心(の欲する所)に従ふ」に至るまで、常に志の向かうところをいうのである。ああ、(陸先生の)寿命を延ばせば、まことに聖人の域に到達し、通り過ぎれば人々を感化し、その場にいれば神のごとく、天地上下と流れを同じくするような功績をあげ、それは小さな利益とはいえず、優れた行為となるであろう。誰が(陸先生の)年齢は、僅かに中年にとどくばかりで、ただ「(五十にして天)命を知っ」ただけだといえようか。

その学旨を遡るに、(陸九淵は)陸九韶(梭山)とは同じではなかったが、同じでない学生諸君にも同じところがあるようなもので、嫌厭しあうことはなかった。陸九齡(復齋)については、はじめは鵝湖の会に際して話し合い、最終的には臨終の際、(陸九淵の)学問の明らかなることを指摘するまで、弁難しあうことはなかった。

文章について論ずれば、かつて(陸先生は)学ぶ者に対して、「理を窮めることが実であれば、文章もすべて実である。またおよそ文章に進歩がなければ、それに伴って学にも進歩がなくなる」といっていた。陸先生の文章は、理と学に即しており、それゆえ精妙にして明白であり、またたびたび先人が明らかにしえなかったところを明らかにしており、鮮麗である。

梭山諱九韶、字子美。復齋諱九齡、字子壽、諡文達。象山諱九淵、字子靜、諡文安。⁽¹⁾郡學舊有祠、未稱也。今郡守國之秘書、葉公夢得、下車之初、士友請易而新之。公即慨然曰、果非所以嚴事也。乃命郡博士趙與輔相與謀之、旋得隙地於學之西、遂肇造祠廟三間、翼以兩廡、前爲一堂、外爲四直舍、又外爲書樓、下列四齋、橫開方地、地外有竹、竹間結亭、內外畢備、祠貌甚設、皆前所未有也。庶幾嚴事之禮歟。左侑以袁公燮、以其爲先生之學、而嘗司庠是邦、且教行於一道。次侑以傅公⁽⁵⁾子雲、以其爲先生之所與、而嘗掌正於是學、且師表於後進。葉公得傅公之傳、而自象山者也。⁽⁶⁾祠實經始於淳祐庚戌之季秋、至仲冬而落成。自是厥後、祀斯祠、登斯堂者、如親侍三先生焉、其不躍然有興乎。由及門而升堂入室、其不有能等第而進者乎。葉公以恢之先君親師先生、而必嘗有聞於侍⁽⁷⁾

下、以記下屬。辭之不得、乃冒犯僭越而述所知者如此、亦或庶幾可以考其淵源之大略歟。淳祐辛亥三月望、後學某記。

〔校異〕

a 自是～某記…此の107字を「云」に作る。

〔注釈〕

- (1) 郡學舊有祠…「年譜」紹熙4年(1193/514頁)に「金谿宰王有大建復齋象山二先生祠」とあり、また楊簡『慈湖遺書』卷2(『楊簡全集』、浙江大学出版社、2016年6月、所収/7・1863頁)に「二陸先生祠堂記」(紹熙4年6月9日との記載がある)が見える。
- (2) 葉公夢得…葉夢得(生卒年未詳)、江西貴溪の人。是齋と号した。陸九淵の門弟、傅子雲に師事し、淳祐10年(1250)から翌11年にかけて、知撫州の任にあった(李之亮氏『宋兩江郡守易替考』、巴蜀書社、2001年5月/501頁)。なお『石林詩話』、『石林燕語』等の作者として知られる葉夢得(1077～1148)は、同姓同名の別人物である。
- (3) 趙與輔…未詳。ただ僅かに『江西通志』(『四庫全書』所収/卷4・18葉表、卷15・44葉裏)には、淳祐11年(1251)、当時知撫州の任にあった葉夢得が陂(堤防)を築いた際に、趙与輔がそれにかんする記(「千金陂記」)を著したとの記事が見える。
- (4) 袁公燮…袁燮(1144～1224)、号は絜齋。陸九淵の初期の門弟で、いわゆる甬上四先生の一人。清・李紱『陸子学譜』卷7、「弟子」2(商務印書館、2016年12月/143頁)、趙偉氏『陸九淵門人』(中国社会科学院出版社、2009年8月/172頁)等を参照。
- (5) 傅公子雲…傅子雲(生卒年未詳)、字は季魯。陸九淵晩年の門弟で、いわゆる槐堂諸儒の一人。陸九淵「語録」の筆頭記録者であり、陸九淵から囑望された弟子の一人でもある。「語録」上・181条(嚴松録/422頁)(また「年譜」淳熙15年(1188・先生50歳)条/503頁)に「松問先生、今之学者為誰。先生屈指数之、以傅子淵(夢泉)居其首、鄧文範(約礼)居次、傅季魯(子雲)、黄元吉(裳)又次之」とある。また『陸子学譜』卷10、「弟子」5(214頁)、『陸九淵門人』(218頁)等を参照。
- (6) 祠實經始～而落成…淳祐庚戌の年に陸氏の祠堂が落成したことは、「年譜」淳祐10年(1250/528頁)に「夏五月、撫州守葉夢得命金谿宰王更創祠堂、增葺書院。初、二先生祠与槐堂異处。乃命王宰以七月六日鼎創新祠于槐堂之前、翼以四齋、環以門廡、自是規制悉出於郡焉」とある。
- (7) 恢之先君～以記下屬…「恢之先君親師先生」は、包恢の父、包揚(顕道、生卒年未詳)を指す。もと陸九淵の門弟であったが、陸九淵の死後、兄の包約(詳道)、弟の包遜(敏道)とともに朱熹に師事した。陸九淵「語録」、および『朱子語類』いずれもの記録者として知られている。『陸子学譜』卷9、「弟子」4(205頁)、『陸九淵門人』(57頁)等を参照。「而必嘗有」以下は未詳。後文とのつながりから、仮に〔通釈〕のように解釈した。

〔通釈〕

陸梭山は、諱は九韶、字は子美。陸復齋は、諱は九齡、字は子寿、諡は文達。陸象山は、諱は九淵、字は子静、諡は文安。郡学には、もともと(陸氏の)祠堂があったが、いまだ称揚されていない

かった。いま郡守である葉夢得が赴任してきた当初、士友らが（祠堂を）新しいものに改めるよう頼んだところ、葉夢得は嘆惜して「（いまの祠堂は）到底、師に対するものだとはいえない」といった。そこで郡博士の趙与軾に命じ、ともに相談して、ついで郡学の西側に空地を得て、かくして三間の祠廟を建て、その左右に渡殿を造り、前方に正堂を一つ設け、外側に直舎（宿直室）を四つ設け、さらに外側に書庫を建て、その下方には書齋を四つ並べた。横側は開けており、敷地外には竹林があり、その竹林の中にはあずまやを設けた。内外の設備はことごとく揃い、祠堂のありさまは十分に備わった。これらはみな以前にはなかったものであり、ほとんど師に対する礼のようである。（陸先生の）下座には袁燮を従祀したが、それは陸先生の学をおさめ、かつてこの国の倉部司をつとめ、また道を教え行ったからである。ついで傅子雲を従祀したが、それは陸先生に嘱望されて、かつてこの学を正し、また後進の手本となったからである。葉夢得はこの傅子雲より教えを受けて、江西象山よりやって来たものである。

祠堂の建築は、淳祐10年（1250）9月に着手し、11月になって落成した。これより以後、この祠を祀り、この堂に上る者は、三先生に近しく従学するがごとくであり、躍如として興を覚えぬことがあるであろうか。また門より堂に上り室に入れば、順序通りに進めぬものなどあるであろうか。葉夢得は包恢^{わたし}の父（包揚）より、必ず（陸先生に）従学した様子を聞いており、（それゆえ包揚の子である）私に（この文章を）記す（ように言ったのである）。辞退したが許されず、僭越ながら私の知るところを以上のように述べてみた。あるいは（陸先生の）淵源のあらましを考究できたであろう。淳祐11年（1251）3月望日、後学である私（包恢）が記す。